

◎等妙寺旧境内の地形を再現したCG



発掘調査による発見

◎等妙寺旧境内の中心域

主要な平坦部の配置から見て、谷川などを境界として、それぞれの性格や機能が異なった4つの地区(①西地区、②中央地区、③北地区、④東地区)から構成されています。

①寺院の中核(西地区)

発掘調査では、主要な遺構が判明するとともに、遺物全体の約8割がこの地区より出土しています。また、輸入陶磁器の中でも奢侈品(贅沢品)を多く含んでいることがわかりました。このことから、寺院の中核として機能していたものと考えられます。

②修行の空間(中央地区とガラク谷)

中央地区は、2本の谷川により結界された間に11の平坦部を配置しています。また、修行の場となる山中(聖域)とつなぐための道として、石を階段状に敷いた遺構(雁木遺構)を築いています。このことから、神聖な空間、修行の場であったと考えられます。

③聖と俗のはざま(北地区)

ここでは、平坦部12(福寿院跡)のほか、いくつもの平坦部が確認できました。中心域への入口にあたり、俗界(山下の世俗)と聖域(山上)とのはざまの空間と考えられます。

④墓域(東地区)

中央地区より谷川を越えて東に2段の集石墓が築かれています。その表面には、五輪塔や宝篋印塔といった多数の石造物が散在しています。中世の集石墓は、全国的にみても数が少なく、それ自体が大変貴重なものといえます。

◎周辺とのつながり

中世寺院は広大な境内を有するため、平場を中継する道が多数めぐらされました。そうした道には、参道や峠道、街道などがあります。また、寺では様々な修行をしていましたが、その行場と想定される地点もいくつか確認しています。

国史跡指定記念企画展

等妙寺旧境内が国史跡に指定されるまでに、多くの方々が発掘調査に携わってこられました。今回の指定は、関係者の熱意と努力の賜物だといえます。これまでの取り組みと発掘調査で明らかになったことを一人でも多くの方々に知っていただきたく、現在、鬼北町歴史民族資料館(下鍵山)で企画展を開催しています。この素晴らしい文化財を後世へと受け継ぎ、守り伝えていくことは私たちの使命だと考えます。7月まで展示する予定ですので、是非足をお運びください。



西地区で出土した遺物

上から 褐釉龍文壺、孔雀文銅製磬、白磁製金箔貼りの金具、青磁、白磁